

佐佐木家の愛犬たち

佐佐木家の犬を紹介する文章なのだが、まず我が家の猫について書きたい。結婚後に世田谷区の佐佐木家を出た私は、現在中野区で妻と一歳になった二匹の猫達と三歳の娘、〇歳の息子と暮らしている。猫を飼ったのは一年前。新型コロナウイルスの流行で近所の公園や児童館が自由に使えなくなっただけで、まだ自分と他者の境界線があやふやだった娘にとって、友達や遊具という鏡を失うことは大きな出来事だった。成長とは異なる変化を見せ始めた娘の為に、犬か猫を飼おうという話になった。程なくして生後間もない鯖虎と三毛の姉妹を頂いた。人と猫の区別もなかったであろう二匹はすぐに我が家の一員となった。特に娘と猫の関係は特別で、一緒におままごとや追いかけっ子で遊び、娘のトイレや風

呂には同行し、娘が泣くと駆け寄って慰め、毎晩額を突き合わせるようにして眠っている。三人の間には種を超えた特別な関係が築かれていて、彼女たちの成長を見守りながら、子猫たちと特別な関係になれなくなってしまう大人の自分を少し寂しく感じている。

佐佐木家の犬の紹介に入ろうと思う。幸綱が高校生の頃に飼っていたのがシェパードの雑種、富士号だ。大きな体躯を撫でられている写真が残っているが、その表情を見れば幸綱と特別な関係だった犬なのだろうことが伺える。写真ページに掲載できていないがもう一匹、一九六四年頃に飼っていたボクサーの雌ピンキーがいる。何度も塀を乗り越えて脱走し、ついには脱走癖が直らずに貰われていったそうだ。

佐佐木頼綱

次に佐佐木家が犬を迎えたのはオランダから帰国した一九九三年。砧公園で開かれていた犬の里親譲渡会で、母が三十人のじやんけんを勝ち抜いて我が家にもらわれてきた柴の雑種の雌、ロッタである。名前の由来はオランダ在住時に右隣の家のイギリス人夫妻が飼っていたノルウェージャンフオレストキヤットの名前からである。猫の名前を取ってきたせいか我が家のロッタも性格が猫っぽかった。中学生の私や小学生の定綱にはそっけなく、父幸綱を尊敬し、母朋子に一番なついていた。そして足の早さが自慢で度々佐佐木家から脱走した。また顔が良かったので逃亡先の家々でも可愛がられる子だった。

ロッタを迎えた翌年に我が家に来たのが雌のゴールデンレトリバー、エリーであ